

極楽 通信

GOKURAKU TSUSHIN

UBUD

vol.12



極楽通信
UBUDY

U・B・U・D ◆ I・N・D・A・H



photo: E. Sugawara

これは、とあるガルンガンの風景です。家々の前には真新しいペンジョールが飾られ、こうして車やバイクにもお飾りが…。最初にこの風景を見た時、「あれ？これって日本のお正月…?!」と変なデジャヴ感にクラクラしました。そこでハタと気がつきました。伝統的な職人芸、粋なおしゃれ心、生活を彩る様々な行事…。バリの豊かさを感じさせるこれらの要素は、改めて振り返ってみると日本の日常生活の中にもたくさんあるのです。

こうして、私はバリに通うようになってから、「日本的なモノ」にも惹かれるようになりました。今じゃ日本で、すっかり着物にハマっています。

菅原恵利子

ꦏꦶꦫꦏꦶꦫ

Vol. 12 1995 Kira-kira

Contents

● Kabar Baru Berita Lama	
マルガラナ英雄墓地 -----	4
バード・パークが出来た！ -----	5
● Bagaimana Caranya? -3-	
バリ式正装のすすめ【続編】&マナー -----	6
● Pepaya	
パパイヤのはなし -----	9
● Dari Jepang	
極楽通信・UBUD のスタッフのみなさんへ -----	12
● BUKU-BUKU 紹介	
アキオ紀行・バリ -----	13
● Belajar Tari & Gamelan -10-	
私とガムラン -----	14
● C・O・L・U・M・N	
ネットワークにバリの風 -----	15
● UBUD よろず百科	
プトゥラガン／Petulangan -----	16
● BINTANG/4	
ビンタン涅槃楽【4】 -----	18
● TOKO BEST 店	
Ganesha Bookshop -----	24
● Warung 味な店	
KOKOKAN CLUB -----	24
● Pondok Manis 私の常宿	
Puri Asri Bungalows -----	25
● Pesan & Kesan 旅人一声 -----	25
● その他のニュース -----	26
● ウブッな人々 -----	29
● ごあんない -----	30
● Pengumuman 伝言板 -----	30

○表紙のことば○

日本画家として活躍していらっしゃる
西野孝志さんの超大作を、今回表紙に使わせていただくことになりました。数年前からちょくちょくと BALI におみえになって、ある時はあの Teges のダンサー Rino から Baris を習ってしまうという西野さんです。

西野さん素晴らしい作品を使わせていただき、ありがとうございました。展覧会のご予定などありましたらぜひお知らせくださいね。

極通 UBUDスタッフより

編集室便り

●入稿に関するお願い

編集部では、Macintosh による DTP 作業で版下を作成しています。原稿をお寄せくださる方で Text Data で入稿可能な方は、以下の方法をお願いします。

☐ Macintosh フォーマットの FD (Text Data)

☐ Dos フォーマット (2DD-720KB) の FD (Text Data)

☐ E-Mail :

MHC03202 : 菅原 (NiftyServe)

GCB01162 : 堀 (NiftyServe)

potomak@st.rim.or.jp (Internet)

eriko@yk.rim.or.jp (Internet)

※詳細は、裏表紙にある日本連絡先事務所までお問い合わせください。

特派員報告 「マルガラナ英雄墓地」

7月のある暑い昼下がり（バリはいつも暑い昼下がりである）、シンガラジャの街で車の調子が急に悪くなり、路肩に車を止めることにした。車を止めると同時に、どこからともなく現われた青年が、応急処置の修理をしてくれた。神の助けか、彼は車の修理が得意なのである。UBUD まで帰るには、ある部品を代えなくてはならない、家まで来れば修理してやるといい、家までつれていかれた。その家はなんと、インドネシア独立戦争の英雄である、ングラ・ライの弟の家であった。弟から兄ングラ・ライの話を聞き、お茶をごちそうになり家をあとにした。このあと UBUD に帰ってすぐにングラ・ライを主題にした独立戦争の TV 映画出演の話があったのは、やはりなにかの縁なのか。

今年はインドネシア独立 50 周年。そして偶然読むことになった本が「帰らなかった日本兵」といやがうえにもインドネシアの独立を考えさせられる年である。

英雄ングラ・ライ、そして独立戦争にインドネシア人と共に戦った元日本兵の存在が気になり、マルガラナ英雄墓地を参拝することにした。

タバナン県の北部マルガ。ここには、インドネシアの独立戦争で命を亡くした、英雄ングラ・ライを含む、多くの英雄の慰霊が各戦場から集められ、バリ州政府によってマルガラナ英雄墓地として建てられた。

1946 年 11 月 20 日、ングラ・ライ隊長は激戦地マルガでオランダ軍と戦い、彼の部隊 94 名と共に殉死した。その日を記念して毎年 11 月 20 日にはマルガラナ英雄墓地で慰霊祭が行なわれる。ここには残留日本兵でインドネシアの独立に参加し戦死した、日本人 11 名も安らかに眠っている。

11 月 20 日、UBUD を出る時は晴れていた、が途中で土砂ぶりの雨にたたられた。そしてマルガラナ英雄墓地もあいにくの小雨模様であった。今年の慰霊祭は、そんな小雨の中で行なわれた。ふだん人々の訪れることの少ない、そしてもちろん観光客の訪れることもない、辺鄙な村マルガも、この日は、各地から戦死者の家族や多くのインドネシアの人々が訪れて賑わう。記念墓地の入口には、100 件以上のさまざまな屋台が立ち、そしてメリーゴーランドのあるミニ遊園地も併設されている。そして四日間毎晩ドラマ・ゴンが催され、夜まで祭りのような賑わいだそうである。

墓地の割れ門を入ってすぐに高さ 10m ほどの記念

塔・チャンディがそびえている。それを通りすぎた奥に 1371 基の英雄の墓が整然と並んでいる。中央には他の墓よりいくらか大きめの、ングラ・ライの墓が戦友を優しく見守るように立っている。墓のあちこちでは傘をさしてお参りする人々が目にはいる。墓の主がバリ人なのだろう、お参りをする家族のほとんどが、バリの正装をして、お墓を飾り、そしてお参りをしている。家族を亡くした人々の悲しみをはかり知ることができないが、お参りする姿には、今ある幸せのいしずえになって戦死した家族を、誇りに思っていることを感じさせる。

墓地内には独立当時のようが展示してある博物館があり、バリの歴史の一面を知ることができる。観光ルートではありませんが、一度は訪れてみてはいかがでしょうか。



バード・パーク (Taman Burung) が出来た !!

石彫の村として有名なパトゥブラン村の隣、シンガパドゥ村にバード・パークができたらしい。動物園は子供の頃には喜んで行ったものだが、大人になるにつれ動物たちがかわいそうと感じるようになり、それからはあまり行くことはない。

デザイナーの友人に公園のデザインが素晴らしいから一度は行ってみたらと誘われ、どうしてバリーにバード・パークか?という疑問と、ひょっとするとバリーならではの素晴らしいバード・パークが出現したのかもしれない、という期待をかけて出掛けてみた。

園内にはパティオ風のレストランとギフト・ショップがある。レストランは美味しい食事ができそうな雰囲気だ。ギフト・ショップの商品は、どれもクオリティが高い。鳥の絵のTシャツ、鳥の木彫りなど、鳥をモチーフにして商品がたくさん並んでいる。

鳥は北アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、アフリカなどの各国から、そしてイリアン・ジャヤなどのインドネシア各地から集められた、250種類、約1000羽が飼育されているそうである。

確かに公園のデザインは素晴らしい。

私はてっきり鳥たちは巨大な建物で自由に飛んでいるものだと思っていた、が、そうではなく決して大きいとは言えない小屋の中で飼われていた。チャンドラワシと呼ばれるバリ舞踊にもなってる極楽鳥は、まさに極楽鳥と呼ばれるにふさわしい綺麗な鳥である。鳥たちは美しく、目と耳を充分に楽しませてくれる。しかし、自然を愛するバリ・フリークにとっては、どうも納得できないバー



ド・パークである。他の土地から動物をつれてくることもあまり好まない。村々で自然に見かけるバリーで棲息する野鳥で満足である。バリー西部自然公園へ出掛ければ、自然の中で自然のままの鳥をバード・ウォッチングをすることもできる。

アフリカから来たフラミンゴは、助走距離が短いため飛べない。そして、食物があわないせいか、自慢のピンク色の羽が色落ちしてしまっている。自由に走りまわれない駝鳥。オウムはストレスから大声で鳴き続ける。これは見ているほうが辛い。

聞くとところによると、経営者はオウムが大好きなドイツ人で、顔がオウムに似ている男性だそうだ(?)。と言っても昨年日本中を騒がせたオウム真理教とはまったく関わりはない。オウムおじさんは鳥を肩に止まらせて歩くほど、鳥をこよなく愛しているというが、はたしてこれで鳥たちは幸せなのだろうか、と疑惑が残る。

入場料はRp11,000と地元の人が、気軽に入場できる金額ではない。どう考えてみても、これは観光客目当てのビジネスである。

環境保護団体の会がここで催されたと聞いたが。いったい環境保護ってなんなのか、ちょっと疑ってしまった、バード・パーク見学でした。

★参考のためバード・パークの営業時間と住所、電話番号を明記しておきます。

営業時間：AM/9:00 ~ PM/6:00 年中無休
住所：Jl.Serma Cok Ngurah Gambir.Singapadu.Bali
電話番号：Tel/Fax:(361)299352

バリ式正装のすすめ【続編】&マナー

いやはや'95年版で毎回続けようと思ってたこのコーナー、もうムチャクチャです。ホントにバリ本部のいいかげんさには、本人達がいちばん反省しとります。自分を責めてはトホホにくれる(?)このどうしようない編集部をお許し下さい。

というわけで Vol.7 の女性の正装。Vol.10 の男性の正装に続き、Vol.12 では、その続編ということで足りないところをフォローしながら、正装した時、いわゆる儀礼、祭礼を見学するときのマナーを少し書き足そうと思います。

最近 UBUD 近郊のオダランで見かける外国人の多くが、ちゃんとバリの正装をするようになってきたように思います。とっても嬉しいことだし、実際バリの人たちも、そう言っています。あとは、そういう場所にふさわしい、バリ・スタイルのマナーを身につければ、さらに Bagus。極通スタッフは常にあるのですが、バリの人々や、彼らの信仰心に対して、私達が素直に尊敬し、尊重し、そして見学させてくれることに、心から敬意と感謝の気持ちを持っていたら、それが自然にその人の立ち振る舞いに現われると思うのです。だから、バリの人たちにも、それが伝わるし、知らずに失敗したときも、ちゃんと教えてくれる。考えてみてください。正装やマナーを完璧に身につけても、心や気持ちが伴っていなかったら? バリの人たちは敏感に感じ取ります。だから、いろいろここに細かく書きつらねても、結局それは、ただの How to であって、いちばん大事なのは、あなたのハートです。極通愛読者の方々だったら、パッチリわかってもらえますよね。

【1】サロンの巻き方…左右はどっちだ?

まず、Vol.10 に掲載された男性編のサロンの巻き方の中で、左右どちらから巻きはじめるとよいか、という疑問がまだ残っていましたね。あれから長らく検討した結果、ベストな方法はコレです。

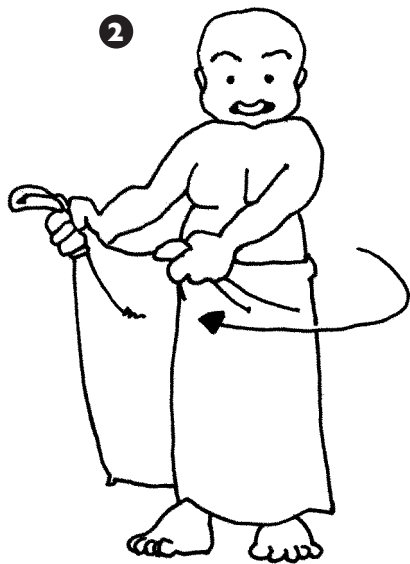
- ① は、Vol.10 を参照
- ② ③ イラスト参照
- ④ ⑤ ⑥ の手順は Vol.10 と同じ。

なぜ左→右に巻くのがよいか、理由はコレです。普通、雨上がりで地面が濡れていると、前にたれ下がったヒダヒダ部の先っぽが地面につかないように、左手でつまんで持って歩くのですが、この時、右→左巻きだと真ん中が割れて、パンツが見えてしまうのです。⑦

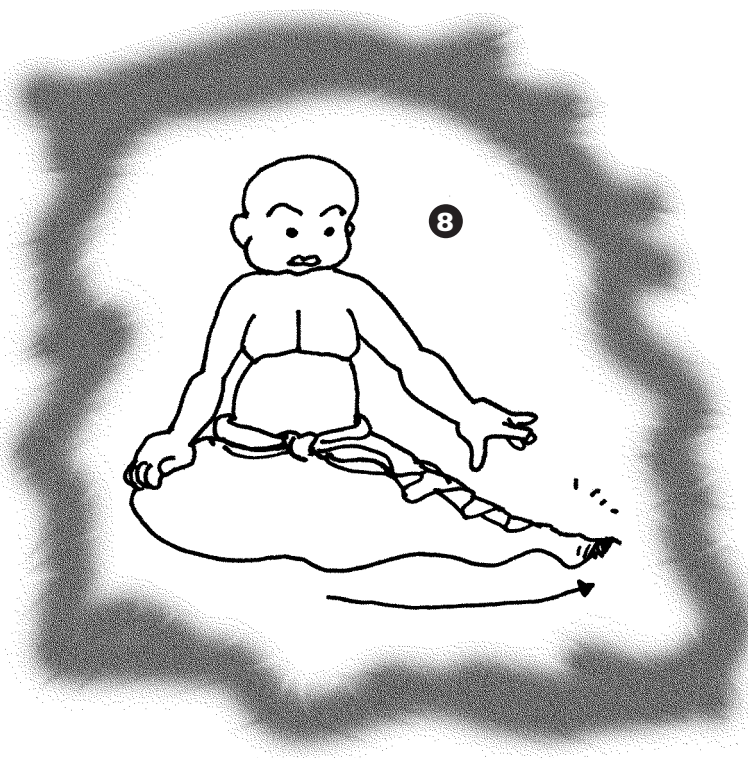
(★腰から下に身につけるものは、下着や腰布も含めて不浄のモノです。よって左手で持つのはあたりまえ。)

そして、地面に座る時(あぐらをかく時)、クビヤール・ドウドウックを踊るような優雅な(ゲゲッ)しぐさで、左手でつまんだヒダヒダをふわりと左側に流す。⑧ カッチョいい～！これでキマリだ～!! 男性のみなさんカガミの前で練習して下さい。コレでバリ人ギャルのハートがいとめるかも！(な～んて、そんなワケないか)

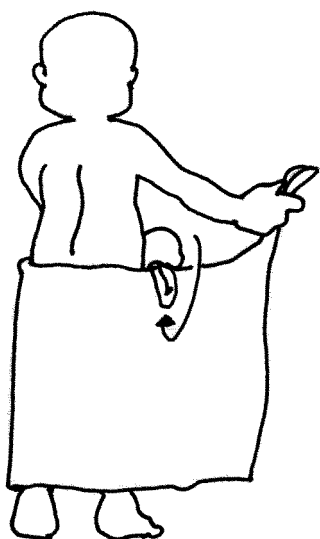
2



8



3



X

いやん、



7

○

こんな
平気、





【2】男性、女性とも、姿勢。

美しく、りんとしていきましょう。ちょっと大げさなくらい胸をはるつもりで。姿勢だけで、カッコよさがbisa半減、bisa 倍増ですよ。歩く時もね。女性はとくにチョコチョコあひる歩きにならないよう、サロンの巻き方を研究しましょう。ちなみに、よほどの事がない限り、走っちゃダメです。

【3】みだしなみ。

髪はまとめる。ハデなアクセサリ（特にイヤリング）はひかえる。オダランや儀礼の場は、パーティー会場ではありません。自分がいかにきれいに見えるか、という努力も時と場所によります。とにかく地元の人たちのようすをしっかりと観察して、勉強しましょう。

【4】マナーいろいろ。

（吉田竹也著：「バリ人の宗教について」を参考にさせていただきました。）

★寺院に入る時 /1

寺院（家の内寺も含む）に入る時、儀礼に参加する前に、必ずマンディ、洗髪をします。神聖な場所に入るには、心、身体ともに清らかでないといけません。だから酔っ払っている人もダメです。

★寺院に入る時 /2

その他(A)ケガで出血している人。(B)生理中の人。(C)近親が亡くなって12日以内の人。(D)子供を生んで42日以内の人も、宗教的な意味だけがれているとされるので儀礼の行なわれている場所には入れません。なお、この(C)と(D)にあたる人は、地域によって日数に違いがあったりするので、その場でその土地の人に確認した方がベターです。

★寺院の入口の注意書きに従おう。

フラッシュ撮影は要注意です。特に寺院に奉納してある神（のシンボル）、バロンやランダ、その他の

仮面やご神体（ススオナンといいます）は、観光用のものではありません。気をつけてください。まず、その場のバリ人にたずねてみることをおすすめします。

★儀礼のじゃまをしない。

- 1: ご神体や司祭より高い位置に行くことは許されません。
- 2: お祈りしている人の邪魔をしてはいけません。
- 3: 大声を出してはいけません。
- 4: 人の前を通る時は腰をかがめ、「プルミシ」（インドネシア語）、「スグロ」（ていねいなバリ語）とていねいに言って通りすぎます。

ふう。あれやこれやと口うるさい小姑のように書きつらねてしまいました。といっても、今までのガイド・ブックでもつねに書かれてきたこととほとんど内容は同じですが、なんとなく、ガイド・ブックのこうした情報って、旅行した時にいかに要領よく、めずらしいもの（儀礼とか祭礼とか）が見られるか、というただの旅行者の立場で書かれているような気がして、さみしく思うことがありますか？それでも決して悪いことではないのですが…。でも極通スタッフは声を大にして言いたいのです。いちばん大切なことは「バリを愛するハート」があってこそ、マナーやみだしなみもサマになると思うのです。

たった三回でおわってしまった「Bagaimana Caranya？」正装&マナー編だけど、すこ〜しでも、みなさんの参考になってくれれば、とてもうれしいです。さあ、みなさん、今度バリに来た時は、どんな儀礼が見られるでしょうか。どこでオダランがあるのかな？

Sampai bertemu di Bali!!

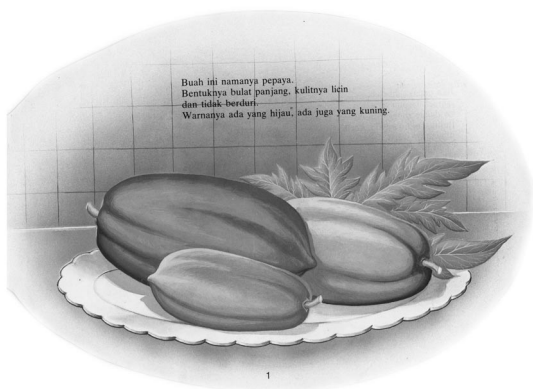


Hak Cipta Dilindungi Undang-Undang / Penerbit MANDIRA Semarang / Anggota IKAPI / Cetakan Pertama 1987 / Disusun: Donna Maria / Ilustrasi cover: Djoni A. / Ilustrasi isi: Djoni A.

●パパイヤのはなし●

Ubud のホーム・ステイやバンガローの朝食に、必ずついてくるフルーツ、パパイヤ。インドネシア語の正しい表記は Pepaya (プパヤ)、普通のバリ語で Gedang (ゲダン) といいます。ほかの国のものと比べると、大型で、味はうすい。バリのパパイヤは、本当はフルーツ・サラダなんかのように、チマチマ小さく切っちゃダメ。よけいに味がなくなります。バリのパパイヤはどでかく切って、スイカのように豪快にかぶりつく。これが一番エナッです。みなさんは是非試してみてください。

さて、デンパサールのとある本屋の絵本コーナーで、こんなものを見つけました。小学校低学年用と思われるこの絵本、なかなかパパイヤについて詳しいではありませんか。パパイヤはバリでは一番カンタンに、そして早く育つ果物としていたるところに生えています。捨てた種が、いつのまにか樹になっちゃいます。そんなポピュラーなパパイヤについて、ここでひとつ、わたしたちも勉強してみましょう。



◆P1

このくだものは、パパイヤです。
かたちはまるくてながく、かわはつるつるしていてとげはありません。
いろは、みどりいろのものあれば、きいろいものもあります。



Jika pepaya dibelah, tampak bagian tengahnya berongga. Di dalam rongga itu terlihat biji-biji berwarna hitam. Bentuk bijinya bulat kecil, jumlahnya amat banyak. Coba hitung, berapa jumlah biji pepaya ini?

◆ P2

パパイヤをはんぶんにもわてみると、まんなかにあながあいているのがみえます。そのあなのなかには、くろいたねがみえます。

たねのかたちはまるくてちいさく、かずはたいへんたくさんです。

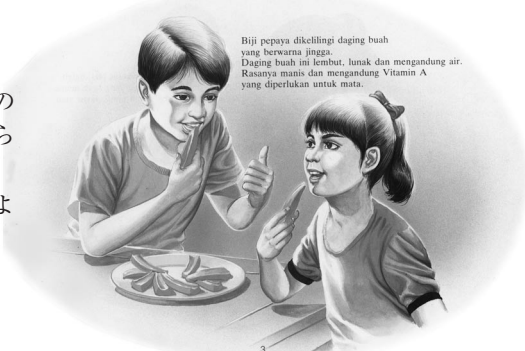
いくつあるかかぞえてみますか？

さあ、このパパイヤには、いくつあるでしょう。

◆ P3

パパイヤのたねは、オレンジいろのみにかこまれています。みはやわらかく、みずみずしいです。

あじは、あまく、そしてめにひつようなビタミン A をふくんでいます。



Biji pepaya dikelilingi daging buah yang berwarna jingga. Daging buah ini lembut, lunak dan mengandung air. Rasanya manis dan mengandung Vitamin A yang diperlukan untuk mata.



Pepaya yang masih muda warnanya hijau dan agak keras bila digigit. Rasanya hambar, ada juga yang agak manis. Pepaya muda cocok sekali untuk sayur atau untuk rujak.

◆ P4

まだ、わかいパパイヤは、みどりいろで、かむとすこしかたいです。あじは、あまりありませんがすこしあまいものもあります。わかいパパイヤは、ルジャッやりょうりのざいりょうにととてもぴったりです。

◆ P5

あなたは、パパイヤをうえてみたいですか？

とてもかんたんですよ。

パパイヤのそのくろいたねをあつめてください。

そして、すこしかわくようほしてください。それから、

よいいしたばしように、たねをうめてください。



Kalian ingin menanam pepaya? Caranya mudah saja. Ambillah biji pepaya yang hitam itu dan jumlahlah sebarang supaya agak kering. Kemudian ditanam pada tempat yang telah disediakan.



Jika kalian rajin menyiram dan memelihara, pohon pepaya akan tumbuh dengan subur. Lihatlah, batangnya lurus tidak bercabang-cabang. Tangkai daunnya panjang dan di bagian ujung tampak daunnya.

◆ P6

もしあなたが、いっしょうけんめいみずをまいたり、せわをしたら、パパイヤのきは、スクスクとそだつでしょう。

さあ、みてごらん下さい。きのみきはまっすぐでえだがありません。

はっぱのついているくきはながく、さきっぽにはっぱがみえます。

◆P7

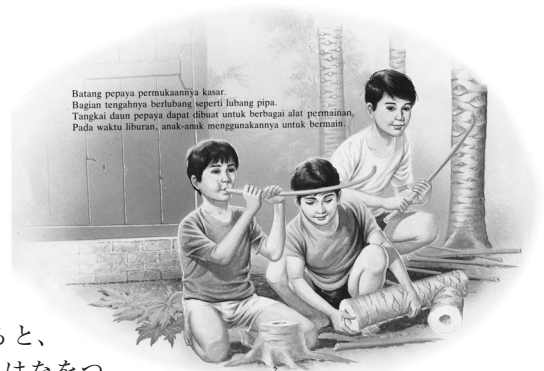
パパイヤのみきは、おもてはでこぼこしています。
まんなかには、あながあいていて、パイプのようになってい
ます。はっぱのついてくるきで、あそぶどうぐをつくるこ
とができます。やすみのひには、こどもたちがあそびにつかっ
ています。



Setelah enam bulan,
pohon pepaya mulai berbunga.
Bunganya kecil,
warnanya putih kekuningan.
Kasarnya pahit tetapi dapat juga
dibuat untuk sayur.

◆P8

6かげつがすぎると、
パパイヤのきは、はなをつ
けはじめます。
はなは、ちいさくて、きいろっぽいしろいろです。
あじは、にがいですが、りょうりにもつかえます。



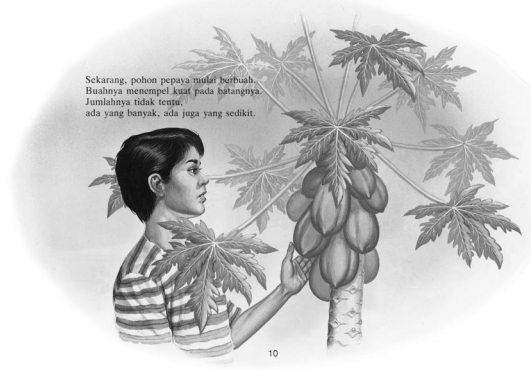
Batang pepaya permukaannya kasar.
Bagian tengahnya berlubang seperti lubang pipa.
Tangkai daun pepaya dapat dibuat untuk berbagai alat permainan.
Pada waktu liburan, anak-anak menggunakannya untuk bermain.

◆P9

パパイヤのはっぱは、おおきくてかたく、みどりいろで、
てをひらいたようなかたちをしています。
みためには、すこしぎざぎざで、あじはにがいです。
パパイヤのはっぱは、りょうりにもつかえるし、マラリ
アのくすりをつくることもできます。



Daun pepaya lebar dan kaku,
warnanya hijau seperti jari tangan bentuknya.
Permukaannya agak kasar dan pahit rasanya.
Daun pepaya dapat juga dibuat untuk sayur dan
untuk obat sakit malaria.



Sekarang, pohon pepaya mulai berbuah.
Buahnya menempel kuat pada batangnya.
Jumlahnya tidak tentu,
ada yang banyak, ada juga yang sedikit.

◆P10

さあ、ちょうどパパイヤのきにみがなりはじめまし
た。
みは、みにしっかりとくっついていきます。
いくつなるかきまっています。
たくさんなるものもあれば、すこしだけなるものもあ
ります。



Lihatlah, pepaya sudah mulai masak.
Kulitnya mulai tampak kuning.
Hati-hatilah jika memecah pepaya,
janganlah getahnya.
Getah pepaya yang menempel di baju,
sukar dihilangkan.

◆P11

みてごらんさい、パパイヤがじゅくしはじめました。
かわがもうきいろくなってきました。
パパイヤのみをとるときは、じゅえきがつかないように、きを
つけてください。パパイヤのじゅえきは、ふくにつくと、とれ
ません。



Pepaya ini sudah benar-benar masak.
Ibu mengupas kulitnya dengan pisau.
Daging buahnya dipotong-potong lalu datur di piring.
Ambillah dan cobalah, sungguh manis dan enak rasanya.

◆P12

このパパイヤは、もう、たいへんよくじゅくしています。
おかあさんがナイフでかわをむいて、みをちいさくきっ
て、おさらにならべてくれました。
さあ、たべてごらんさい。
ほんとに、あまくておいしいでしょう？

DARI JEPANG

極楽通信・UBUD のスタッフのみなさんへ

河内の女より

「極楽通信・UBUD」毎回楽しみに、首を長〜くして待ってます！

極・UBUD の Vol. 1 ~ Vol. 10 はいつも私のベッドの横に置いてあり、今まで数えきれへんほど読み返してます。不思議なことに何度読み返してもあきないんです。眠れない時には極・UBUD を読んで、眠りについています。

極・UBUDのおかげで友達もできました。伝言板のコーナーで「BALI フリークの人、手紙ください〜い」という呼び掛けに、鼻息ゴォーゴォーもんの手紙を書いて。BALI での出来事、情報、写真の交換など・・・今でも文通させてもらっています。

10月27日から11月3日の短い期間やけどBALIへ行きました。今回の旅行はほんまに最悪な出発になりました。それは27日の出発当日のことです。私はうきうきするんと鼻の穴全開で空港に着いて、飛行機チケットをもらうために受付カウンターで待ってました。すると突然、私の前で並んでいた女の子が泣き出したんで、わけを聞くと、取れてるはずの飛行機チケットが取れてないので、BALIに行けないということです。私と友達は「そりゃかわいそうやなァーそりゃ泣くわ〜」と人ごとのように同情していると「あなたたちも取れていません」と係員の冷たい一言。「わお〜、うそやろォ〜それ」詳しく聞くとどうも私達の頼んでいたツア〜会社は倒産し、社長がとんずらしてしまったそうで、はっきり言へば私達はダマされたというわけです。目の前真っ暗、ボォ〜と死人のように落ちこんでしまったが、BALIで友達も待っているし・・・くやしーし・・・。そして私は、新たに飛行機チケットを購入し、次の日、BALIにやってきました。

大変くやしい思いはしましたが、カウンターで泣いていた女の子と友達になったり、文通している人の写真で見かけた人にも偶然会って友達になったり。極・UBUDのおかげで、大変楽しい思いをさせてもらっています。ありがとうございます！感謝感謝！！

BALIにはまだ2回しか行ってませんが、ハマッ

てしまった私にとってはBALIの事は何でも知りた〜いんで、日本にいながらBALIの空気に少しでも触れることのできる極・UBUDは大変ありがたいです。

トイレのことで一つお願いがあります。今回BALI行きは「左手洗浄に挑戦しよう！」とはりきってたんですが、あの手オケは、右手で持っておしりの後から水をぶっかけて左手でピチャピチャと洗うんですか？それとも左手で水をすくって洗うんですか？いろいろ考えているうち、もうひとつ勇気が出ず、結局トイレットペーパーを使ってしまいました。勝手にUBUDに住もうと思っている私にとって、このトイレの問題は大変重要なことなので、次には必ず左手でするようがんばろ〜と心に誓っています。お願いというのはこの左手洗浄の正しい方法を教えてほしいのです。少し汚い話ですが、もし極・UBUDにスペースがあいたら是非紹介してください。それからニュピ、ガルンガン、クニンガンの過ごし方。そして地元BALI人や日本人長期滞在者の過ごし方なども紹介してほしいです。

「ももたろうバリ日記」はすご〜く好きなのですが、このままなくなってしまうのですか？早く続きが読みたいです。今までおもしろかったのは、Vol.3のどたばたコンビ珍道中。Vol.7と9のWAYAN君のAdo.Ad.Jepang（これすご〜く好きです）。Vol.10のBALIにライオン出沒の飼育係のパパとの会話とグラドキャンオン出現の農夫のおっちゃんの会話など、すご〜くおもしろかったです。Vol.4のひとりのWAYANには、あんな短い文章やけど思わず涙ポロリでした。あとVol.2のKe Mana?は「ん〜なるほど」と大変勉強になりました。バリ語のKenken Kabar?やOm Santi Santi Santi Omなど。これからも簡単なバリ語でええんで、あいさつとか、愛をバリ語で語る・・・など、バリ語のをせてもらえたらすご〜くうれしいです。お願いします。

「極楽通信・UBUD」のスタッフのみなさん、体に気をつけて、これからも楽しいUBUDの記事を送ってください。



アキオ紀行・バリ

「アキオ紀行・バリ」 深谷 陽。めでたく単行本となって再登場!!

1995年2～5月、週間モーニングに連載されたアキオ紀行ーバリ島編ー。

極通 Vol.8 では、おそれ多くも本人に BUKU 紹介として、イラスト入りの一筆を書いてもらいました。そして“もし連載中の人気が高ければ単行本になるかもしれない”と聞いて、極通スタッフはじめ、彼を知る UBUD フリークたちは期待に胸ワクワクだったわけですが、ついに出ました。実は'95の12月には、すでに店頭に並んでいたそうですが、UBUD まで情報が届くのが少し遅れたようです。ちょうど今回の原稿を書いている時に、作者の深谷さんが UBUD に訪れていて、読者からのファンレターのことや、このあと連載が続く予定の「アキオ紀行ーベトナム編ー」のこぼれ話などを楽しく聞かせてもらいました。

実をいうと極通スタッフは、深谷さんがプロの漫画家としてデビューする、ずっと以前から知り合いで（もちろん UBUD で出会いました）、彼が特殊メイクのお仕事をしていたことや、お姉さんがすでにプロの漫画家であることなど、前から聞いていました。（ちなみにお姉さんは、深谷かほるさんといって、とても美しい方です）

そして以前、『アクアのボトルを投げ捨てないで!!』のキャッチでアクアくんのイラストを描いてもらい、Tシャツをつくったこともありました。

背が高くガッシリしてて、ちょっとはにかみ屋だけど、とっても気のいい、そして、とても優しいハートの持ち主である深谷さん。

ここで、気になる事をひとつ聞いてみましょう。

Q:「アキオ紀行」のストーリーは実話をもとにしているのですか？ そして、ひょっとしたら主人公のモデルは実在の人・・・？

A:「う～ん、へへへ、きょう今から UBUD に新しくできた、おスシ屋さんに行くんだ～」

Q:「・・・へっ？ ??? あのと・・・おスシのネタでなくてエ・・・」

A:「ゴメンゴメン。・・・たいへん難しい問題なので、読者の方のご想像におまかせします」

……、とのことでした。

Aduh ～、カンジンなことが聞けませんでしたねー。

日本に帰ると、プロの漫画家として忙しい日々が待っている彼。それでも時々「ちょっと UBUD でひと休み」の休暇をとるそうです。今回も滞在中、極通の他のページのイラストを手伝ってくれました。ホントに感謝!!

極通スタッフはじめ、Teman Teman di UBUD は、みんなキミをイロイロ応援しています。

がんばれ 深谷 陽!!



モーニング KC-444

「アキオ紀行」

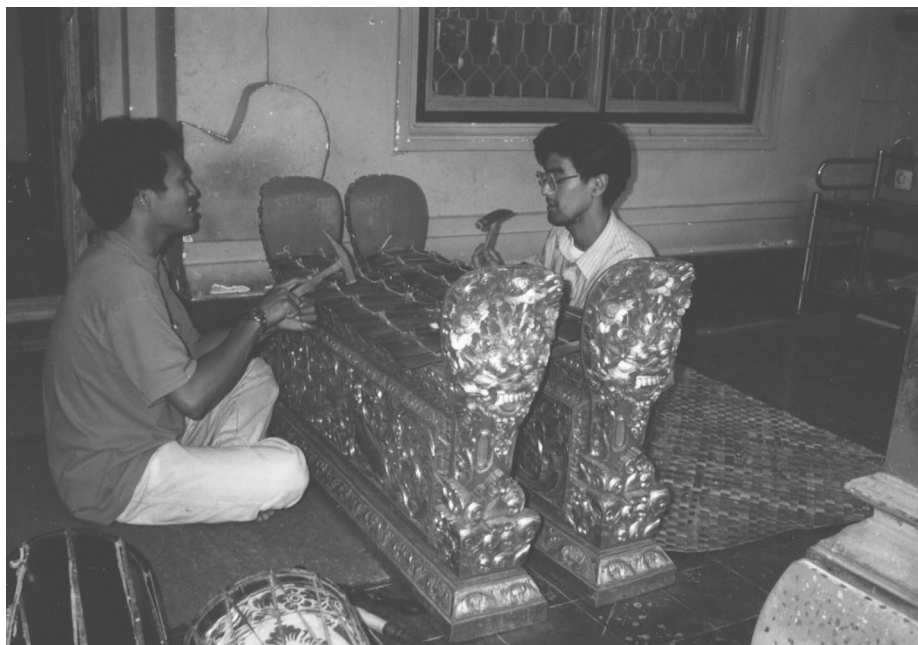
著者：深谷陽

発行所：(株) 講談社

定価：520 円

私とガムラン

小沢 剛也



はじめてガムランに出会ったのは5年前、まだ学生のときでした。いつかはバリへ行ってこの耳でガムランを聴いてみたい、というのが私の夢で、今年の夏やっとその夢が実現しました。ウブドゥへ来て間もなく、プンゴセカンで祭り（オダラン）があると聞き、一人で暗い夜道を歩いて出掛けました。お寺の近くまで来ると、夢にまでみたガムランの響きが聞こえてくるではありませんか、私はもう胸が一杯でした。一人座って感激に浸りガムランを聴いていると、村の若者達数人が私の隣に座り込み、あれこれ話しかけてきた。その中の一人が日本語で「明日は私も演奏するから見に来て」と言う。私は「うん、明日も来る」と約束して帰りました。次の日も、また次の日も歩いてプンゴセカンのオダランに出掛けました。そして毎晩のようにバリ舞踊を見て2週間後、私はスマラ・ラティのクンダン奏者 DEWA BRATA さんからガムランを習うことにしました。毎日1時間ほど練習に、プンゴセカンの彼の家に通いました。最初はパリスの曲から。これは1週間程である程度マスターできたので、次はレゴン・クラトン・ラッサムにチャレンジすることにしました。ところがこの曲が意外と複雑で習っても習ってもすぐに忘れてしまい、ちょっと先生を手こずらせてしまったようである。しかし、熱心に練習に打ち込む私を先生は決して見捨てません、むしろ熱いハートで答えてくれたような気がします。

改めて感じたことは、ガムランに限らず音楽に一番大切なものは「心」なのだなということです。次にまたバリを訪れることが出来たら、レゴンを最後までマスターし、さらに他の楽器にも挑戦したいと思っています。

ネットワークにバリの風

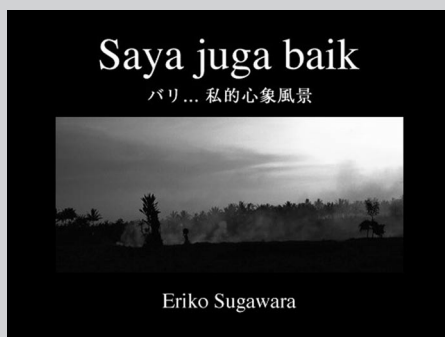
菅原恵利子

1993年に「Saya juga baik」という電子アルバム作品をNifty-Serveというネットワークにアップした。バリで撮ってきた写真と個人的な散文をまとめた小さな「写真日記」である。好評だったので、翌年「Saya juga baik -2-」を作ってアップした。そのうち、雑誌にオマケでついてくるような「フリーウェア集」なるCD-ROMに転載してもいいかという依頼が、ポロポロきだした。アジアが好きな人達の草の根BBSとか広告代理店のBBSとかからも転載依頼が舞い込んできた。全部に「どお～ぞお～」と返事を書いた。

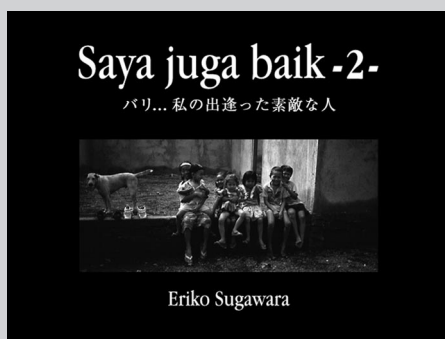
そんなこんなしている間に、「見た。」という人達からたくさん電子MAILが届くようになった。「いつもマンガラバンガローに泊まっているんですよ。」とか、「グンデルワヤンのロチェンさんの弟子なんです。」なんて人。「Watashi wa Bali ga suki de...」と、日本語が送れないカナダのBBSから送ってくれた人。「睡眠時間を削っての多忙な毎日。愛機Macの中に、ふと垣間見たバリ。心が温まります。」などなど…。私が「Saya juga baik」の中に閉じ込めたバリの風は、電子となってネットワークで自由にソヨソヨふいてるらしい。もはやすっかり旅に出した我が子状態。(笑) 元気に飛び回って欲しいと願うばかりだ。

さて、その上調子こいて「Saya juga baik / インターネット版」も作ってしまった。URLは、<http://www.st.rim.or.jp/~potomak> このホームページの中の「Club Bali」というページにおいてある。んが、グラフィック多用でちょっと重いのが「みんなゼツタイアクセスしてね！」って言えない理由。(笑) ま、そのうち、機械がおいつくでしょう。何事も実験、実験。

そんなわけで、この極楽通信も将来的には、ホームページ化すると便利だろうなと思いつつ、こんなことを実験している。老後は、バリに住んで「極楽通信 UBUD / ホームページ管理人」なんてことにならないモンかな…?!



ソフト名: Saya Juga Baik 「バリ…私的心象風景」
登録名: Saya juga baik
バイト数: 539520
登録場所: Nifty-Serve
SMACCG (コーシンググラフィックスステーション) データライブラリ 6 番 #2
対応機種: Macintosh (QuickTime が必要)



ソフト名: Saya Juga Baik -2-
「バリ…私が出逢った素敵な人」
登録名: Saya juga baik -2-
バイト数: 892160
登録場所: Nifty-Serve
SMACCG (コーシンググラフィックスステーション) データライブラリ 6 番 #310
対応機種: Macintosh (QuickTime が必要)

◆インターネット版 / URL◆

http://potomak.com/bali/baik_1/baik_1a.html
http://potomak.com/bali/baik_2/baik_2a.html

□ E-Mail
MHC03202: 菅原 (NiftyServe)
eriko@yk.rim.or.jp (Internet)

プトゥラガン (Petulangan)



▼虎



▲牛 (Lembu)

バリ島観光のハイライトの一つに火葬式がある。不謹慎と言われそうであるが、この儀礼がバリ人にとっても、最大のセレモニーである。

火葬式の風景は、祭りと錯覚してしまうほど明るい。

烈しくシンバルを叩くガムラン隊の音にせかされるように、行列は足早に火葬場に向かう。たくさんの男達に担がれた二台の神輿が、ダイナミックに練り歩く。神輿の一つは、なきがらを火葬場まで運ぶ巨塔でバデと呼ばれる。もう一つは火葬場に運ばれたなきがらを納めて焼く張り子の棺、プトゥラガンと呼ばれるものである。プトゥラガンは火葬場に用意された、新しい白布の天蓋が取り付けられた屋根のある、火葬堂バレ・パバスマアンに置かれる。なきがらはバデからプトゥラガンに移され、燃やされる。プトゥラガンが燃えはじめると、バデにも火がつけられる。

プトゥラガンには、さまざまな形があり、カーストによって形が決まっているようである。たとえば、ブラフマとマンクは白の牛(Lembu)、クシャトリア、ウエシャは黒の牛、ちなみに男性は雄牛、女性も雌牛だそうである。スードラは獅子(Singa Ambara)や半象半魚(Gajah Mina)。時には木で作られた四角の箱状の簡素なものであることもある。1993年。最後の王様の火葬式といわれたギヤニアルで見えたものは、立派な竜(Naga Raang)のプトゥラガンであった。ほかにも虎、鹿などもあると聞く。現在ではスードラでもお金があると牛を使っているようである。これも地方によって異なっているようで、一概に言えない。



▲竜 (Naga Raang)

1



2



3



4



5



トゥブサヨで獅子のプトゥラガンを作っているところを見かけたので取材してみた。

プトゥラガンは火葬式の何日も前から、近隣の男達によってつくられる。

1: いげたに組んだ木枠の上に、板材と裂いた竹で動物の形がつくられる。今まで目撃したものは胴体と脚が太い木の幹で作られていたが、ここでは板材が使われていた。ジグソー（電動自在のこぎり）によって形がつけられ、これで重さと労働時間が軽減されることであろう。胴体は背中が蓋のように開くようにつくられる。

2: 木の幹で形作られていた脚が板材になったので、ココナッツの皮をいくつも張りつけてボリューム感をだす。顔は他でつくられて持ってきた。

3: 全身をフェルト布で覆う。

4: フェルト布の上から、並行してつくられていた金箔やラメ、そして小さな鏡がふんだんに取り付けられ、飾られて、完成…。獅子がキラキラときらびやかに輝きだす。

5: 完成した獅子は担ぎ棒が竹で組まれ、あとは出番を待つだけである。

男達は分業で器用に作業をこなしていく。小屋やテントの中で、バリ・コピをすすり、雑談をしながらの10日間の作業工程でした。

第9章

や、やばい。(FROM THE BEGINNING)

朝早くテラスに出てみると、隣人のグンターが部屋の前のソファで本を読んでいた。彼はドイツ生まれのアメリカ人。どういった経緯があってアノム宅に滞在しているのかは知らないが、白髪まじりの髭にまで気品が漂う、上品を絵に書いた様な大学教授タイプ（それも柳沢）の紳士である。

「早う、グンター。引っ越してきたよ。」

「お早う、ヒロシュ。歓迎しますよ。」

昨日、私は彼がいない時間にやって来て、外出して戻って来た時には彼は寝てしまっていた為、未だ会っていなかったのだ。

「ちょっとこの本を見てください。図書館から借りて来たのですが、とても興味深く気に入っているのです。」

ウォルター・シュピースを紹介している本らしい。所々に絵が綺麗なカラーで印刷されていた。

「文章を完璧に理解する程の語学力は無いけれど、絵を見ているだけでも面白いね。」

「そうですね。私はもう少ししたら出かけますが、ここに置いておきますので、良かったら見て頂いても結構ですよ。」

「有り難う。何処に行くんだ？」

「トレッキングをしに行くのです。」

「この暑さの中を？」

「ええ。私は煙草は喫いませんし、お酒も余り飲みませんから、この歳になっても健康でいられるのです。」

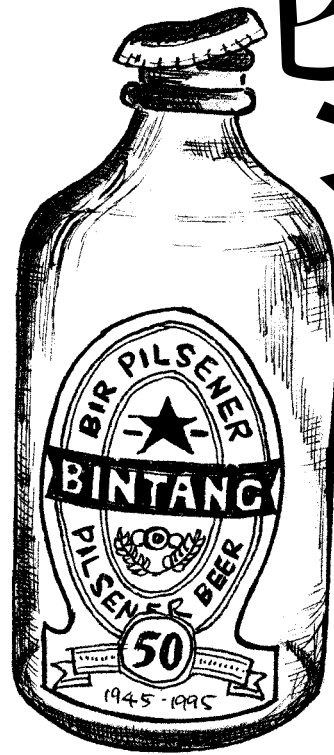
「俺は煙草は一日二箱喫うし、ドラキュラが嘔みついたら酔っぱらう位酒も飲むけど、至って健康だよ。」

「ふむ。人それぞれなのでしょうね。」

文章にするとなんという事もないが、本当に、上品な紳士なのである。

用事があるから午後から見てやる、とアノムが言うので、午前中は一人で復習。今まで会得したフレーズを手元を見なくても繋げて弾ける様に練習するが、強烈に難しい。ダンサーが次の展開に曲を進ませようとする時には一瞬早く合図を送る事を思い出し、フレーズ毎を見ないで演奏出来ればどうにかなろう、という事にする。

南部弘



ビンタン涅槃集

4

昼近くから町に出てマウンテン・バイクを帰る日まで借り切る。ウブドに来たばかりの時は、周辺観光地を急いで廻る様な旅でもないし、雰囲気を感じようと思ってわざと歩いていたのだが、もうさすがに辛くなって来たのだ。

昼食を摂る為に（ビールを飲む為に）影武者に向かう。どうも後ろのタイヤの空気圧が甘い様な気がしてならない。まあ大丈夫だろうと思って食事を済ませて店を出ると、完全にパンクしていた。

幸い、昨日までの滞在先であったニョマンのホテルからは1キロ足らずの所に位置するので、ポンプを借りるべく担いでいく。しかし現地人さえ日陰で休んでいる程暑いバリの昼下がりを、壊れた自転車を担いで歩くのはきついぞ。ホテルに着いた時には疲労困憊の極みに達していた。更に運の悪い事にはポンプが壊れていた。ここを出て右に少し行った所に自転車屋があると言うので行ってみる。

ちょっと混んでるから1時間程かかる、と従業員

が言う。約束があるんだ、出来るだけ早くやってくれ、と願います。暫くしてから私のマウンテン・バイクを見て、こりゃ駄目だ、と言う。

「こんな酷いのどこで借りたんだ？」

「え、モンキーフォレスト通りの近くだけど。」

「ここ見てしろ。タイヤが割れている。パンクするのは当たり前だ。」

あ、本当だ。

「それにほら、ペダルが歪んでネジが2本無くなっている。がたがただ。こいつは事故をやってるぞ。一体、いくら払ったんだ？」

値段を言うとはびっくりしていた。

「そいつは酷い。うちは半分の値段で新品を貸してるぞ。」

「もう払っちゃったんだ。」

「とにかく、こいつは金を出して借りる様な代物じゃない。一応パンクは直すか、乗って帰るんだったら気をつけて行け。いつタイヤが破裂するかも知れないしペダルが落ちるかも知れない。確実に転ぶし、そうなった時に車が来ていたら、バーンッ！お陀仏だ。」

あったまきた。相場以上の金を払わされたのは別にどうだっていい。俺は納得したのだから。しかし、自転車を出して商売をしているのだったら、整備するのは当たり前じゃないか。国民性の違いがどうのこうのと言う問題じゃないだろう。俺は信用していたからこそ細かくチェックせずに借りたのだ。俺は壊れた自転車に腹を立てているんじゃない。俺が信用した奴に裏切られたから腹を立てているのだ。金さえ貰えれば後はどうなっても知らないと言っても言うんだろうか。あまりにも無責任過ぎやしないか？

レンタサイクル屋に戻る。いいか、極力冷静になるんだぞ、お前には逆上癖がある事を忘れるな。

「おい、パンクしたぞ。」

「そうか。修理費はお前持ちだ。」

「そんな事どうだっていい。自転車屋はもうこいつは駄目だって言ってる。見てしろ、ペダルはがたがたで、タイヤにはひびが入ってる。注意しないと危ないと言っていた。」

「ああ、本当だ。」

「俺はこんながらくたはいらん。」

「金は返せないよ。」

「誰が金を返せと言った！ちゃんと整備してある奴

と交換しろ！」

インドネシアでは余り大声を出すのは下品とされている。(どこだって同じか。) さすがにびっくりした様で直ぐに代品を持ってきたが、こいつも余り新しくなさそうだ。一応チェックをする。

「こいつは信用していいのか？」

「大丈夫の筈だ。」

「そいつで商売をするつもりなら、一度完全にオーバーホールしろ。」

日本に帰る日に返しに行ってみたが、例のマウンテン・バイクは同じ状態で『FOR RENT』の札がかかっていた。駄目だ。やっぱり観光客相手の商売をしている奴は信用出来ない奴が多い。

しかし、なんでこうなんだろう。ろくでも無いものに対してまで観光客が彼等の経済感覚を混乱させる様な金額を落として行くから、こういった金を払う価値の無い商売が横行してしまうんだろうか。

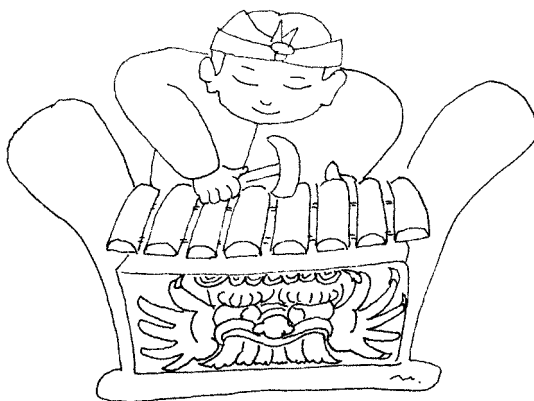
午後の練習の為、アノム宅に戻る途中で犬に追いかける。道はゆるやかな傾斜がある登り道で、路面の石畳の状態が悪い為に、自転車では追いかけて来る犬と同じ程度のスピードしか出せない。ポチはぴったりと後ろにつけ、ガウガウ言いながら何度か飛びかかって来る度に興奮してくる。これはまずいな。脇道もないし、あと50メートルもすると石畳さえ無くなってしまふ、という所で奴は諦めて引き返していった。丁度門の真正面だった。

少しガンサを弾いているとアノムが民族衣装で出てきた。どうしたんだ、と聞くと、友達がどうのこうので訪問をするんだ、と言う。

「ヒロシユも行くか？」

「サロンが無いからな。」

「俺のを貸すよ。」



他のバリ人の家庭も見てみたかったので、同行させてもらう事にした。

アユと二人の子どもも一緒だ。アユが私のサロン姿を見て冷やかす。

「ヒロシュ、まるでバリ人みたいに似合ってるわよ。」

「旦那に借りたんだ。本当は自分も一揃い欲しいんだけど、土産物屋にいてもどれが良くてどれが悪いんだか判らなくてね。」

「そうなの。丁度いいわ。途中で私のお母さんの家に寄るんだけど、プティックをやっているのよ。」

「見立ててくれる？」

「バリ人にしてあげる。」

アユの実家はステージ用の衣装や、バリの民俗衣装やダンス用の衣装、小物を主に扱っている店だった。私が朝市で買った香油のセットも置いてあった。

全身一揃いを見立ててもらう。その辺の土産物屋に置いてあるようなプリント物ではなく、全ての模様が織り込みか刺繍で出来ており、素人目にも品質のいいのが判る。ちょっと色彩感覚がどぎついような気もするが、それがバリ人のお洒落なのだろう。従業員に着付けをしてもらう。

「どうだ、アノム。バグースか？」

「ん。バグース！」

アユのお母さんも車に乗り、ギャニャールのどうのこうのしたと言う知り合いの家に着く。なんだかアノムはセンシティブになっている様な気がしていたのだが、門を入れて始めて気がついた。お通夜だったのだ。なんだってアノムは私を誘ったのだろう。おまけにこの恰好きたら、まるでガムランのバンドのステージ衣装みたいだ。とてもお通夜向きとは思えない。日本の葬式にいくらお洒落でも振り袖を着ていく馬鹿はいないだろう。

帰りの車の中でアノムに聞いてみる。

「俺、他のバリ人の家を訪問するのは始めてだったんだけど、何か不都合な事はなかったか？」

「ん？言ってる意味が良く分からないが。」

「いや、だからさ、訪問する時の礼儀作法とか、そういったものがあるだろう。俺はどこか外してなかったか？」

「いいや、何も問題なかったけどな。」

それならいいんだが。

「そうだ、ヒロシュ、スマラ・ラティーのテープは持ってるか？」

「いや。売っているのか？」

「ああ。」

「パリスは入っているのか？」

「勿論。」

「欲しい！是非欲しい！」

「じゃあ、カセットショップに寄って行こう。お前が買うと高くなるから、俺が買って来てやる。」

部屋に戻り、早速テープを聞こうと思ってウォークマンにスピーカーを繋げていると、一緒に聞き取りをしよう、とアノムがやって来た。

パリスの頭出しをする。ケースの時間表示を見ると8分程の曲だ。どの部分をどの位繰り返すかによって曲の長さが決まってくる事は知っていたが、思っていたよりも長い。

曲が始まった。クンダンの複雑なイントロに導かれて耳慣れた最初のフレーズが始まる。

筈だったのだが……………。

あれ？なんかおかしい。良く聞けば私の練習しているフレーズは聞き取れるのだが、どうも今一つ私が思っていたのと雰囲気が違うのだ。

あーっ！しまった！リズムを裏表逆に覚えてしまった！

今まで他の楽器と合わせずにやってきていた為、自分に都合のいい拍子の取り方をしてしまっていたのだ。一度身体に覚えさせてしまったフレーズを半拍遅らせて演奏するのがどれ程難しいか想像出来るか？最初からやり直すよりも大変なのだ。こいつはえらい事になってしまった。

「ヒロシュ、明日からこのテープに合わせて練習しよう。」



「アノム～、やばいよ。俺、リズムの取り方間違ってた。」

「ええっ!？」

苦勞するな、お互い。

第10章 芸術は金にならない

昨晩は何回となくパリスのテープを聞き、曲の構成を書き取って、ベッドに入ってからヘッドフォンで1時間以上繰り返し聞いていたのだが、染みついてしまったものを拭い去るのは難しい。テープに合わせながら演奏をするのだが、どうも曲になってない様な気がしてスムーズに行かないのだ。

午前中は先生も付きっきりで四苦八苦。昼食ははさんで1時間程集中して練習した後、アノムと雑談をしながら軽く流す。再来年に3度目の日本公演をする予定が有り、楽しみにしていると言う。

「俺は日本に行く時はオフの日に原宿に行くのが楽しみなんだ。ラフォーレの近くの喫茶店でストリートウォッチングをするんだ。東京の女の子は可愛い子が多いな。」

一流のダンサーと言えども、普通の男なのである。「原宿でふらふらしてる様な女には東京人はまずいないぞ。」

「え、そうなのか？」

「ああ。大体東京周辺か、さもなくばもっと田舎の方から遊びに来ているティーンエイジャーばかりだ。俺も高校生の時には良く行ったもんだ。」

「そうだったのか。あららら。」

「それに次にアノムが来る時には原宿なんかに行く歳じゃないよ。せめて吉祥寺か下北沢辺りにした方がいいんじゃないか？」

「新宿からだったらどう行ったらいい？」

この目は真剣だぞ。

「電話をくれれば俺が連れて行くよ。一緒に遊びに行こう。」

夕方になってから、スマラ・ラティーのパフォーマンスを見に行く為に、散歩がてら早めに外出しようとする、アノムが玄関先でステージ用の化粧をしていた。ちょっと待ってれば一緒の車に乗せて行

く、と言う申し出を、途中で夕食をするからと辞退し、メインストリートをぶらぶらしていると、アノムのお父さんがバイクに乗って追いかけてきた。レストランまで送ってやるから乗れ、と言う。折角のご好意なので甘えさせてもらう事にした。

食事（とビール）を済ませ、開演10分前に会場に着く。グループの世話役をやっているらしい、アノムのお父さんがバックステージに案内してくれたが、ステージが芸術家の聖域ならば、バックステージは寝室のような所であり、本当はおいそれと部外者が立ち入ってはいけない場所なのだ。アノムは絵葉書やカセットのケース写真でお馴染みの姿になっていた。私は、まるでアノムみたいだね、と冗談を言ったが、心ここに在らず、といった面持ちで、うん、と頷いただけだった。完全に気合が入っている。この日のスマラ・ラティーのパフォーマンスについてはあえて細かくは描写しない。しようとしてもし尽くせないだろうからだ。あえて少しだけ言及させて頂ければ、やはり前回のステージではアノムは踊っていなかった事、（もし踊っていたとしたら忘れようも無い程素晴らしかったからだ。）アノムの踊りはダイナミック、かつ恐ろしい程の緊張感に満ちており、殆ど神がかりと言っても過言ではなかった事、アユの踊りはリズムの取り方が絶妙で、大変に神経の行き届いた繊細なものであった事、非常に美人なアノムの妹、オカのレゴンドダンスは実に優雅であった事、（惚れちまった。）勿論、他のダンサー達の踊りも大変に素晴らしいものであった事、途中停電があり、場内は真っ暗になったにも関わらずバンドは完璧な演奏を続け、会場の入口に車が着けられヘッドライトでステージを照らした時に、ダンサーは表情一つ変えず踊り続けていた事、演奏は躍動感に溢れ、時には激しく、時には優しく響き、目をつぶってみるとまるで音が空中で踊っている様だった事、見終わった時には掌にじっとりと汗をかいていた事位は付け加えておく。

ステージ終了後にアノムの家族、隣人のグンター、数人のバンドのメンバーと影武者に行く。暫く和やかに談笑していたのだが、その内、アノムがグンターに何か相談を始めた。と言うか、怒りをぶちまけているといった感じである。

グンターに聞いてみる。

「アノムは一体どうしたんだ？」

第11章 辞書が無い！

「彼はスマラ・ラティーの経営について悩んでいるのです。先日、公共団体の主催でデンパサールでパフォーマンスをしたのですが、何千人という人が集まったにも関わらず、ブローカーがスマラ・ラティーにお金を払わないのです。」

私は学生時代に音楽事務所に飼い殺しにされた経験がある。とても他人事とは思えない。

「俺は20の時に一年程の間事務所に所属するプロミュージシャンだった事があるんだが、その間、撮影に金がかかった、今金を払うとプロモーションが出来ない、レコード会社への接待費が必要だ、なんて言われて、ついに会社は俺に一度も給料を払わなかった。」

「本当か？信じられない。」

「こういう諺がどこかの国にあるらしい。芸術には金を払え。芸術家には金を払うな。ハングリーじゃないといい芸術は生まれない、という意味らしいけどね。」

「そんな馬鹿な事ある訳ないじゃないか。」

「勿論、芸術家を食べ物にして金を儲けようとしている奴らの詭弁さ。それに、腹が空いてないと堕落するような奴に、芸術ができる訳ないじゃないか。」

「そりゃそうだ。」

暫くしてアノム一家が先に帰ると言う。時計を見ると10時半を廻っていた。子供達はおねむのようだ。俺はもう少しいるから、と言うと、使用人のマデをおいていくからバイクで送ってもらえ、と言うので飲んだくれる事にした。

時折、もうちょっといい、とマデに聞きながら真夜中近くまで飲んでしまった。まだまだいけるんだが、余り遅くなっても悪いと思い送ってもらう事にした。

部屋に戻りパリスのテープを聞く。先程のステージでも演奏されていたので、なんとなく感じが分かってきた。ああ、音楽にどっぷりの日常。学生時代、ろくに学校にも行かずに一日中ギターを弾いていた頃の充実感をこの歳になって取り戻せるなんて思ってもみなかった。明日の練習が楽しみだ。

朝、テラスでぼーっとしていると、アノムが日本の雑誌を持ってグンターの所にやって来た。私はコーヒーを飲みながら、彼等の会話にそれとなく耳を傾ける。

「ほら、ここにスマラ・ラティーの記事が掲載されている。」

「おう、アノム、この写真は良く撮れていますね。何と書いてあるのか判らないのが残念ですが。」

「俺も判らないんだ。」

まずいな。ヒジジョーにまずい。

「おう、私達にはヒロシがいるではないですか。」

やっぱり来たか。

「ヒロシ、ここには何と書いてあるのですか？」

仕方ない。

「ちょっと見せてくれ。」

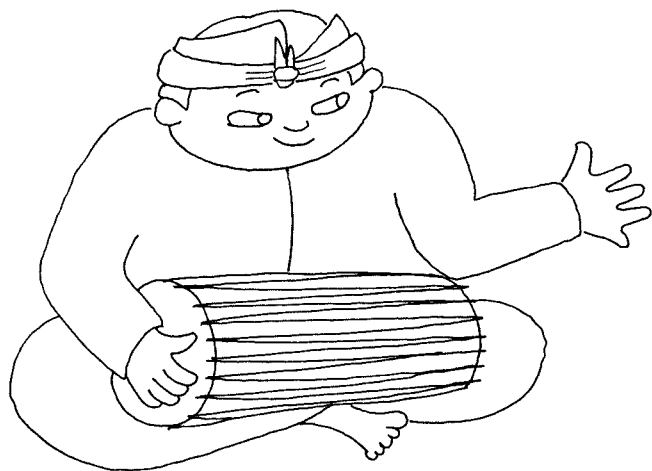
ざっと目を通すと、パリの音楽事情と共に、グループ及び使用している楽器の紹介が、文学的なもってまわった文体で綿々と綴られていた。日本語で書かれているのに日本人の私が理解出来ない様な表現もある。こんなの口頭で訳せる筈が無い。私の語学力では無理じゃ。

「ちょっと時間をくれ。自信はないけれど翻訳してみる。」

引き受けてはみたものの、文法には全く自信が無い。思い出せない単語もあるのに辞書すら無いのだ。知識の引出しを全てひっくり返してどうにか恰好がついた時には昼近くになっていた。こんなに頭を使ったのはおそらく始めてだったであろう。脳味噌がパンパンに張ってしまった為、昼食を摂り一休みしてから練習する事にした。

アノム達は外出したまま帰って来なかったの、テープに合わせて一人で練習する。思っていたよりも上手く行き、間違いながらもどうにか最後まで弾き通せる迄になった。

2時間程練習した後、マンデイをして外出した。モンキー・フォレストの中にあるお寺のオダランに参列する為である。昨日、影武者で近所の寺でオダランがある事を聞き、店の従業員がお供え物を持って行くから一緒にどうか、と誘われていたのだ。オダランでは境内でガムランの演奏や踊りが奉納芸と



Illust:M. Ohhara

して上演される。私の興味の対象はここにあった。

私の持ってきた衣装はオダラン向きではないらしいので、イトウさんの衣装を借りて着替える。パリ人が我々観光客の不法なふるまいに対してどんなにおおらかだとは言っても、信仰という神聖な行為がおこなわれている場所に入出入りするには、それなりの恰好をする必要がある。これは祭りの時に限らない。観光ツアーで行くような由緒あるお寺なら尚更であろう。観光客の為に、お寺がある訳ではないのだから。バスツアーに参加した時に行った寺では、略式の正装であるスレンダンという帯を貸してくれていたが、門の所で腰に巻いてくれようとしているのを、日本人のツアー客のおっさん達が、「そんなもんいらん。」と断って揉めていた。誰が好き好んであんなのぶよぶよの腹なんかに触りたがるもんか。どういう意味があるのかくらい、ちょっと考えれば判りそうなもんだろうが。旅の恥はかき捨てる癖に郷に入っても郷に従わないんだから困ったもんだ。

オランダ人の熟年カップルも合流して出かける。従業員は果物やお菓子のお供え物を50センチ程に積み上げた盆を頭の上に乗せている。相当な重量がある筈だし、積み上げたものを崩さないようにするだけでも大変な筈だが、随分上手に歩く。そう言えばパリのお婆ちゃん達はみんな背筋をしゃんと伸ばして姿勢がいい。

寺院内部はお香の匂いが充満しており、一種異様な空気が境内を支配していた。パリ式のお祈りをし

(オランダ人達は正座するのに苦労していた。) お供え物を清めてもらう。お供え物は持ちかえて皆んなで食べるのだ。実に合理的だ。残念な事にまだ奉納芸は上演されていなかったが、楽器群は見る事が出来た。金と赤の彩色が施された楽器群は、その存在自体が音楽の存在を主張してくる程の迫力がある。

影武者に戻り、食事をしながらビンタンとブラム、そしてアラックという椰子の実から作った蒸留酒を飲む。朝鮮人参を漬け込んだこの店のスペシャルメイドだそう。随分とアルコール度数は高そうだが喉越しが滑らかなので、馬鹿な話をしながら3杯もいけてしまった。

ちょっと飲み過ぎたようだ。なんだか頭がぐらぐらする。みんながキングギドラみたいに見えてきた。もしここにキングギドラがいたら八又のオロチだな、なんて馬鹿な事を考えている場合じゃ無い。「俺、ちょっと酔っぱらったみたい。少し横になっていいかな。」

「どうぞどうぞ。」

ああ、いい気分だけど気分が悪い。(どっちなんだ。) 天井で蛍が舞っているように見えるがとまっているのかな。よく判らない、等と思う間もなく意識が混濁し、どす黒い眠りに引きずりこまれていった。我ながら幸せな奴だ。

Toko ◇ BEST 店

Ganesha Bookshop



前から気になってたガネーシャ。ただのブック・ショップではありませんぞ。インドやチベットあたりのニオイがぶんぶんする小物から、ちょっと変わったバリ小物、そしてなんと手軽な楽器がたくさん並べてあって、コレはコレはフツのおみやげじゃ納得しないあの人にびったし！のモノが買えるユニークなお店なのです。

パロンの足についているバリ製の鈴（ひとつひとつ大きさも音色も違ってカワイイ！）や、とっても小さいけどいい音のするタイコ、などなど、ちゃんと定価がついてるし、おねだんも、とてもリーズナブルです。

さらに、一番の特筆はコレ。バリのガムランをはじめ、クンダン（タイコ）やスリン（竹笛）のワーク・ショップを週一回やってくれちゃうのです。参加費はひとり 15,000 ルピアと良心的。実は極通スタッフ

はまだ参加したことなくて、どんなモンなのか、よくわからないのですが、おそらくワーク・ショップは英語で行なわれるので、英語の得意なヒトにはいいかもしれませんね。くわしいことは直接ここに行くか、もしくは、電話で予約してほしいそうです。



Jl.Raya Ubud Bali Tel:(361)96359

Warung ◇ 味な店

Thai Restaurant and Bar
KOKOKAN CLUB

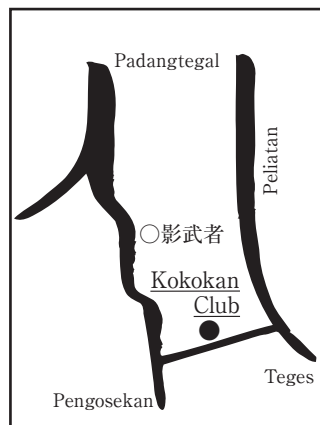
ワルンなんて言って紹介したら、ヨコツツラを思いきりひっぱたかれそうな、超高級ワルン、あっ違う、タイ料理レストランです。実を言うと、すでに2～3年前にOPENしているレストランなのに、なんとなく「高級」そうな雰囲気極通スタッフはタジタジしてしまって、今の今まで取材に行けなかった、という、いわくつきのところですよ。

…で、勇気をふりしぼって行ってみると、ウーム、なるほど、あの、アゲン・ライ・ギャラリーのアゲン・ライ氏がオーナーだけあって、ゆとりの空間といい、スタッフのマナーといい、ムムム…やはり超高級…と思いきや、意外にメニューのおねだんはお手頃。高くてもメインディッシュが一万ルピア前後だから、節約旅行者も、ひとふんばりすれば、余裕で食べられるおねだんです。

メニューは、前菜もおいしいし、トム・ヤム・クンもまあまあ、メイン・ディッシュもボリュームがあって、洗練されたタイ・フードって感じかな。タイ人コックさんがいるそうですよ。んで、お水とごはんはおかわり自由みたいなので、これもポイント。

余談ですが、ミック・ジャガー夫妻もよく食べにくるそうです。

一階にはバーもあって、ステキなバリニーズのバーテンダーくんが、おいしいカクテルをつくってくれます。



Jl.Pengosekan Ubud Bali
Tel:(361)96495 Fax:975332

Puri Asri Bungalows

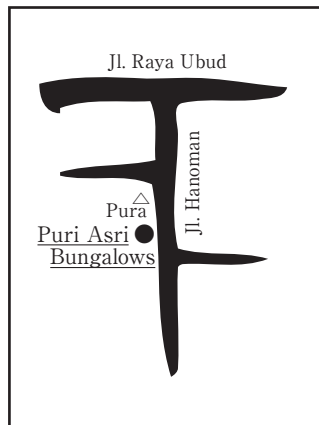
MIKI & YUKI

Jl.Raya Ubud から Jl.Hanoman を南下してゆくと、右手に白い建物がある。ここが Vol.4 のお医者さん Map に紹介された「Jero Ketut Warniti 産婦人科」です。この病院と同じ敷地内に「Puri Asri Bungalows」があります。通りに面した病院に近い方に、デラックス・ルームが3棟、もちろん扉はキンキラのバリ彫刻です。そして、その奥に、私達が泊まった1棟3室のスタンダード・ルームがあります。ホット・シャワー付きでは考えられないような破格値のため、約1ヵ月も腰をすえてしまいました。

ときどき聞こえてくる Ubud には似つかわしくないディスコ・ミュージックがたまに傷ですが（隣の人が好きらしいです）、部屋は広くて清潔で、働き者の Made 君が作ってくれる朝食も美味しいです。近くには陽気な Wayan さんと日本語が話せる Ayu さんがいるツーリスト・オフィスがあり、ひとりであることにさびしさを感じた時には、いつも明るくむかえてくれます。産婦人科もあることだし、女性には安心して泊まれる宿だと思います。

Address: Jl.Hanoman No.34 Padang Tegal Ubud

Tel: 975353



Pesan & Kesan

旅人一声

●みきゆきのゆき

バリは、来れば来るほど、またやめられなくなってしまう。でも来ずにはいられないから困る。1回目はバリの事を全然知らずに来たけど、すぐに大好きになって2回目はその3ヵ月後の来てしまった。3回目、つまり今回は、地元神戸の地震なんかで1年と3ヵ月後になったけど（この間、耐え忍ぶののつらかったこと）無理矢理卒論を終わらせて来てしまいました。なんと提出したのが日本出発前日の夕方！一週間ほど書き続けたので、来た当初は右手の指はみごとにペンにフィットする形になっていました。

日本でのことや、私なんかは将来の事ももっと考えないといけないけど、来てしまったら、すごく幸せて、やっぱり好きで、もうなんでもいいのだ、きっとこれでいいのだ。今回の旅も終わりになっちゃったけど、また絶対来るからね！もっと長期でくるからね！で、いずれ住みついてやるからね！という新たな野望がふつふつと心の中からわいている。

●みきゆきのみき

とにかくゆっくり出来るところへ行きたくて、バリへ来た。なのに、見るもの聞くもの、そのほかたくさんのもに刺激されて、私は真っ黒になって歩きまわった。

今回、3度目にしてやっとゆっくり出来る居心地のよい場所を見つけた。特別じゃない普通のバリ。でも普通すぎて、その場所にはいない自分を考えると、つらくてつらくて仕方がない。ああ、今度はいつ、ここに帰ってこられるだろう。そして、いつか、わかれることを考えて泣かずにすむ日が来るのだろうか。

その他のニュース

■ Ubud に大型スーパー・マーケット登場 ?!

皆さん最近の KUTA に行きましたか？

Jl. Pantai・クタの一角に、でで〜んと巨大ショッピング・センターができましたね。数年前の素朴でのんきな KUTA が好きだった人たちは、さぞびっくりしてしまうだろうというさまがわりです。スーパー・マーケットで、お土産でも日用品でも手に入ってしまったら、地元の人々が細々と経営している

お土産屋さんやワルンはだいじょうぶなのかしら…と少々心配していた矢先、UBUD にもできちゃいました。大型というより中型のスーパー・マーケットが。その名も「DELTA DEWATA」。場所はアンドンの警察署の真向い。でもまだ建物全部が完成しておらず、とりあえず 1F のみ OPEN で、日用品、お菓子、調味料など、けっこう品数も豊富です。そして、値段が安い。TINO や DEWI MAS のミニ・スーパーなんかと比べるとぐ〜んと安い。2F も完成したら、衣料品や生鮮食料品も期待できそうです。ともあれ、我々外国人にとって便利になればなるだけ、村は変わっていくのでしょうか…。UBUD が KUTA みたいになったらイヤだけど、ヘア・スタイリング・ムースが Ubud で手に入るの嬉しいと思った極通取材班でした。



■最新ランドリー・サービス OPEN !

ところはパダン・テガル、JL.Hanoman のなかほど。ピカピカの洗濯機が並んでいるので、てっきり電化製品屋かと思ったら、ランドリー、そう洗濯屋さんでした。「もしかしてコイン・ランドリー?!」とも思ってたずねてみると、ちゃんと作業スタッフがいて、朝出すと夕方仕上がり、夕方出すと翌朝仕上がりというシステムでした。それも洗濯のあと、乾燥機を使って乾かし、アイロンまでかけて一丁あがり、という最新設備による速攻サービス。早ければいいってもんじゃないかもしれないけれど、直接日本に帰国せず、UBUD から他の土地に旅発つツーリストなんかは、出発前日にこのサービスを利用したら便利ですね。特に雨期は、洗って干しておいたジーンにカビが生

えているくらいだから、乾燥機はありがたいです。ちなみに料金は(例) Tシャツ 600Rp、ジーパン 1,000Rp、etc。シューズ 1,500 ~ 2,000Rp なんているのもあって、大助かり。その他ドライ・クリーニングやプレス(アイロン) オンリーもできます。上手に利用しましょう。



■おもな見どころ

「地球の歩き方」の愛読者であるアユ子さん(39)は、プラ・タマン・アユンのお掘りのたもとに、人の一生に関する儀式がジオラマと写真で解説されている「儀式博物館」が見どころという説明に誘惑されて出掛けました。その時の情報をお便りいただきました。

プラ・タマン・アユンの西隣にある、ロイヤル・ガーデン・レストランで「ミュージアムはどこにありますか」と尋ねると「奥」と教えてくれました。そして「今日は営業していますか」と聞くと、「ブカ(やっています)タピ(が)ルサツ(壊れている)」という言葉が返ってきました。OPENしているが、壊れているとはどういうことか、と複雑な気持ちで行ってみると、そこには確かに展示場がありました。火葬式に使う、張り子の牛も展示してありました。が、やはりルサツでありました。入口のテーブルに手提げ金庫が一つ寂しく置かれ、係りの人はいません。展示物は雑然とし、埃にまみれて、ほとんど廃屋です。なにか恐い雰囲気、私はそそくさと帰ってきてしまいました。本には立

派な博物館でもあるように書かれてありましたが、これは見るに足らないものです。でかける価値はありませんのでお気をつけください。…とのことでした。(笑)



■日本人専門インフォメーション OPEN!!

憧れの UBUD には訪れてみたものの、何をどうしてよいのやら、まったくわからない。しかし、あれもこれも欲張りに見たい、聞きたい、体験したい。そんなあなたに、強い味方ができました。その名は「情報センター APA」。

バリ舞踊、ガムラン教室の紹介。オダランなどの宗教儀礼、各種パフォーマンス、エキジビション、そして「APA」企画のとおきのイベント情報などが満載です。

宗教儀礼を見学したい人のためには正装のレンタル。バリ舞踊の衣裳を着たい人のためには貸し衣裳と着付け、メイク・アップもサービス。バリの結婚式の衣裳の貸し出しと披露パーティも受け付けています。またホテルの予約もできますのでご利用ください。

Jl.Monkey Forest.UBUD.TEL:96246



■ Apa itu?

1995 年 10 月 11 日。ポンゴセカン村のプラ・スバックでは、村をあげての厳粛なウパチャラのあと、境内にある大樹の幹の一部が切り取られました。これはプラのご神体(ススオナン)である、バロンとランダをつくるためのお面の材料となります。以前、プラ・スバックにもバロンはあったのですが、最近になり盗まれてしまい、このたび UBUD の王族であるチョコルダ氏の寄付によっ



て、つくられることになりました。当日はチョコレート氏の立ち会いのもとで、チェーンソーによって切り落とされました。

樹のふくらんだ部分のことをハミル状態・木が妊娠していると言い、その部分を切り取ります。一部を切り取られて、ちょっとヘンテコな形になってしまった樹も、年月とともに復元・ハミルします。そして、またお面がつくられることがあるそうです。

それは、村のプラ、または他のプラのためのスオナンとして彫られるわけですが、同じ樹からつくられたスオナンは、兄弟扱いされます。それぞれプラに納められたスオナンは、兄弟たちのプラのオダランには必ずかけつけ(?)ます。(それは、オダランが始まる前日の夕方、ムベエツと呼ばれる村人たちの行列や、バレ・ガンジュとともにおごそかに運ばれてきて、オダランが終わると同じように帰っていきます)。

写真の左側をランダ、右側でパロンをつくるそうです。オダランでムソラ(スオナンが奉納の舞をすること)するのは、いつのことでしょう。楽しみです。

BAIは

さて、もうすぐ雨期も終わりに近づいてきました。

日本はまだまだ寒いようですね。桜の季節が待ち遠しいでしょう?

▶ 今年も BAI の人気グループが
どんどん海外公演に行きます。

ちょうど今、(2月初旬から4月中旬!!)

2ヶ月半という超ロング・アメリカツアー

に出ているのは、プリアタンの巨匠集団

グン・サリ Gunung Sari。ティルタ・サリのレゴ

ンで活躍中の大御所、スリさん

と ヨー・ラティさんや、Batubulan の

大所、スエチャさんなど、知る人は

思わずのけだてほうメンバーを従えて

のツアーです。ちなみに公演内容は

チャロナラン。アメリカで観るチャロナラン

は いったい どんなものでしょう?

▶ おなじみ Jegog (ジゴグ) の

Suar Agung (スアル・アグン) は

今年の夏に日本公演決定です。

公演日程は 7/25 ~ 8/10。徳島

や神戸、そして大分、佐賀などの

都市がほぼ決定しているようです。

うれしいことが山盛り次第、この

極通の紙面でお知らせしたいと

思います。

スマラ・ラティ
Semara Ratih

日本公演 決定!!

UBUDの若手グループのひとつ、
Semara Ratih (スマラ・ラティ)
の日本公演が決定しました。
ただいま ともに向けメンバーは
毎日 ハード・レッスンにはげんでい
ます。公演内容は 今まどと
つと味もふた味もちがうモノで、
(ちよとマニアックか? という声も
ありますわ)、ガムラン・フリークの
あなには きっと大満足。何が
出るかは お楽しみに!! 特にアユの
レズン・スマランダナは鳥肌モノです。
必見ですよ。必見!!

3月28日—東京 4月4日—えひめ
30日—倉敷 5日—福岡
31日—岡山 6日—奈良
4月2日—神戸 11日—東京
13日—大宮

会場・チケットなど、くわしいことは
下記まで お問い合わせを....。

03-3226-4159

ヒカシモト・ケイコ

うぶな人々 その12 ほりり



【年間購読申込み方法】

エアメールで、その旨手紙をください。宛先は「影の出版会:伊藤」、住所は巻末のBALI本部です。料金は、4,000円。おりかえし申込み用紙と送金方法をお知らせします。また、お急ぎの方は、郵便振替用紙の通信欄に年間購読希望と書いて送金してください。振替先口座: 00190-6-573859「影の出版会」です。



Zwölfe

30, 1 2, 1 2, 1 2, 1 2, 20, ..



Terima Kasih



発行人：伊藤博史

編集：伊藤博史 / Yumi S. / えりり / 堀 祐一

エディトリアルデザイン：菅原恵利子

写真：堀 祐一 / 伊藤博史

カバー絵画：西野孝志

ロゴデザイン：Hiroko S.

極楽通信「UBUD」Vol. 12

1996年2月25日発行

発行・販売：影の出版会

Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wighraha
Jl. Suweta No.16, Ubud, Bali,
80571, Indonesia tel.(0361)96134

©1995 影の出版会 禁無断掲載





影の出版会事務局

- BALI 本部 Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha Jl.Suweta No.16,
Ubud. Bali, 80571, Indonesia tel.(0361)96134
- 日本連絡先 〒 106 東京都港区麻布台 3-4-4 Iikura Comfy Homes B-102
ポトマック株式会社内 , tel.03(3583)0801 fax.03(3583)0803